

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

十一 寄木細工の臨床
備忘録(1)



家族援助あれこれ

子どもの精神科を始めた頃は、まだそんな看板で仕事ができる環境はなく、外来の片隅で控えめにやってました。

振り返ると、臨床心理学や社会心理学など近接領域からたくさんのことを教わりました。

あれから五十年弱、頭のあちこちにこびりついてクセ化した寄せ集めが、最近になってポロポロと剥がれていきます。そこで、そのクセたちを備忘録としてまとめることにしました。

いつものように、マンガは作者の団士郎氏の許諾を得て、木陰の物語と家族の練習問題から転載しました。

子どもの精神科といっても、お客はほとんど大人（親たち）で、悩んだり困ったりしているのも親のほうが圧倒的に多いです。

そこで大人とか子どもではなく、家族というくくりで診ることにしました。



子どもの精神科 の特徴

- ①ヘルプを求めているのは当の子どもよりは、大人（親たち）であることが多い。
- ②大人のみの来院でも、診療・支援への支障はまったく無い（家族システム）。



家族の求めは、子どもの『問題（としているもの）』に関する自説への賛同、そして解決策です。家族の説は（妥当性は別として）、『問題』の持続に一定の役割を果たしている重要な情報です。

家族の自説が
果たす役割

自説に沿った解
決行動↓効果が
なくとも自説に
固執↓『問題』
の遷延化、怒り
の拡散

やがて説の中身よりも、自分たちの腑に落ちるように仮説をたてる家族の流儀に関心が向かうようになりました。

ここで言う流儀とは、実際にあったエピソードを根拠にしたストーリーの組み立て方です。



臨床のクセ その一

- 自説を組み立てる
「家族の流儀」を
診る
- ① エピソードの選
び方
 - ② エピソードの繋
ぎ方
 - ③ 意味づけの傾向



家族が自説にこだわるのは、子どもの『問題』に限らず、同じ流儀で世間と向き合い、物語を生きてきたからだと思います。

たとえば、家庭・学校・社会における自分（家族）の立ち位置とか他者からの評価など、自分を取り巻く状況の認知にもこの流儀は生きているはずです。

家族の流儀
子どもの『問題』
の理解の仕方
≡
社会における自
分の立ち位置や
評価の捉え方



いや実際はこっちが先で、その流儀で子どもの『問題』を理解したということでしょう。

こうした流儀に変化が起きれば、自説へのこだわりが消えて解決行動は柔軟に変えられるでしょう。さらには、ライフスタイルの変化にもつながるかもしれません。

小川の飛び石
を伝って向こう
岸に渡る時、
その難易度は水
の流れより石の
選択にかかって
いる、という話
でした。
引き続き、次
も次号自得にし
ようと思います。